

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	和語と漢語の意識分離の混乱と実態について
Author(s)	小泉, 節子
Citation	児童の言語生態研究 , 9 : 20 - 24
Issue Date	1978-06-08
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045100
Right	
Relation	



和語と漢語の意識分離の混乱と 実態について

小泉節子

I 序

子どもたちの日常話すことばを聞いていても、ほとんどが和語である。それは和語が感覚をそのままことばにしたものだからである。子どものことばの成長を考えると、始めからことばを学んでいたわけではなく、自分の感覚を音にしたり、それに似たことばを使いながら、ことばを獲得していく過程が考えられる。だが、学年が進むに従い、子どもたちは何かを考えようとするときに、漢語を使うとする。これは知的に物事を考える手助けになることをどこかで感じているからだらう。このように、和語と漢語を考えていくと、子どもたちには全く違う要因からそれらのことばが入っていくと思われる。にもかかわらず、小学校では単に漢字のふり仮名として、音読み(漢語)訓読み(和語)が教えられている。すべてが記憶力まかせであるために、それが和語であり、それが漢語であるかの区別さえ、あやしい。子どもたちが何らかの知恵でもって、和語と漢語を区別するとしたら、音感による異なる意識の有無によると思われる。子どもたちの和語と漢語の意識分離を見るのがこの調査の目的である。

(1) 問題文

まちがいさがしの問題、★問題は二問あります。

下記の①～⑳までの漢字には、みんな二通

りの読み方があります。その二つの読み方を整理して、一方を右に、もうひとつは左に、例のように書いてあります。

(例) 話(わ)・輪(りん)・花(か)
はな　　はな

ところが、①～⑳までの漢字の読みがなのつけ方が、右と左と反対になっているものがあります。それを見つけて、その漢字の()の中に○印をつけましょう。

① 池(いけ)　② 千(ち)　③ 血(ち)　④ 子(こ)　⑤ 糸(いと)　⑥ 紙(かみ)
⑦ 市(いち)　⑧ 指(さし)　⑨ 火(か)　⑩ 日(ひ)　⑪ 皮(かわ)　⑫ 水(みづ)
⑬ 他(た)　⑭ 時(とき)　⑮ 耳(みみ)　⑯ 寺(てら)　⑰ 世(よ)　⑱ 夜(よる)　⑲ 田(た)
⑳ 野(の)　㉑ 根(ね)　㉒ 実(み)　㉓ 身(み)　㉔ 馬(うま)　㉕ 夜(よる)　㉖ 皮(かわ)
㉗ 戸(と)　㉘ 図(ず)　㉙ 都(と)　㉚ 目(め)　㉛ 芽(め)　㉜ 歯(は)

れんしゅう ↓ ⑦ 家(か)　⑧ 歌(か)　⑨ 左(ひだり)
すな　　すな

㉑～㉖までの熟語について答えましょう。
㉑～㉖までの熟語には、そうは読めても、そういう使い方をしないものがあるが、39個あります。その熟語の読みがなに△をつけましょう。△は、ア・イの記号のところにつけましょう。例にならって、れんしゅうをしましょう。

(例) ① ア人間(にんげん)　② アひと(ひと)　△人(ひと)　△人(ひと)
れんしゅう ↓ ① ア下(した)　② ア下(した)　③ ア下(した)　④ ア下(した)　⑤ ア下(した)　⑥ ア下(した)　⑦ ア下(した)　⑧ ア下(した)　⑨ ア下(した)　⑩ ア下(した)　⑪ ア下(した)　⑫ ア下(した)　⑬ ア下(した)　⑭ ア下(した)　⑮ ア下(した)　⑯ ア下(した)　⑰ ア下(した)　⑱ ア下(した)　⑲ ア下(した)　⑳ ア下(した)　㉑ ア下(した)　㉒ ア下(した)　㉓ ア下(した)　㉔ ア下(した)　㉕ ア下(した)　㉖ ア下(した)

(2) 問題文作文のポイント

● 問一 訓読みと音読みを左右に書き、その入れまちがいを指摘する。音からどの程度、和語と漢語の区別がつくか、どうか調べるためのものである。
①～⑳までの漢字は一字一音のものを選り、同じ発音でも和語になったり、漢語になったりするものが、どの程度、音から区別がつくかテストを作った。また㉑～㉖までは、三つづつ一組にして同じ漢字を入れ、どこで漢語と和語を区別することができているかを見るために作成した。

● 問二

㉑～㉖までの熟語で、問一の音読み訓読みの問題でつけた読み方は、当然全部そう読めるものばかりである。だが、この中で、それを日本人

が選択して読んでいるかを、使われていない読み方を指摘することにより、どの程度感覚鋭く区別できるかを調べるためにこの問題を作った。

ハ注・①～⑳までの漢字は、四語(血・場・身・都)を除いては、一、二年生の漢字。㉑～㉞までは六語(枯・枝・若・化・造・羊)を除いては三年までの漢字を使用V

調査校

- 二年生 東京・四谷第六小 三十五名
- 川崎・稲田小 四十二名
- 東京・第一寺島小 三十一名

(計 一〇八名)

三年生

- 秦野・広畑小 三十六名
- 東京・町田三小 三十九名

(計 七十五名)

四年生

- 東京・南第四小 三十七名
- 東京・南第四小 三十七名

(計 七十四名)

五年生

- 横浜・大正小 三十八名
- 東京・町田三小 三十七名

(計 七十五名)

六年生

- 東京・四谷第六小 三十六名
- 東京・町田三小 三十六名

(計 七十二名)

調査実施日

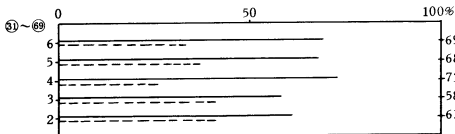
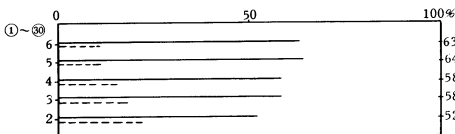
昭和五十二年十二月～昭和五十三年一月

	(学年)																						
	6	5	4	3	2		6	5	4	3	2		6	5	4	3	2						
① い池ち	6	0	3	8	11	㉑ お前ね	21	17	15	11	19	㉑ ひんか	33	43	20	51	41	㉑ まんた	63	56	70	59	64
② さんち	20	53	19	12	17	㉒ と実み	58	55	50	68	34	㉒ なま	60	49	65	24	42	㉒ ちんちん	19	17	20	25	35
③ ちち	65	70	54	61	56	㉓ ん身み	58	43	49	63	39	㉓ ちんちん	50	51	35	72	69	㉓ ちんちん	44	51	39	63	45
④ こ子し	16	50	22	13	21	㉔ ま馬ば	6	1	7	4	15	㉔ ちんちん	53	57	47	83	74	㉔ ちんちん	21	20	19	27	38
⑤ と米し	10	0	5	5	16	㉕ じ場ば	51	37	36	49	44	㉕ ちんちん	83	88	85	81	73	㉕ ちんちん	44	45	24	48	31
⑥ と紙し	10	4	7	8	15	㉖ こ戸と	79	83	81	83	81	㉖ ちんちん	43	51	28	55	46	㉖ ちんちん	55	48	66	37	52
⑦ と市し	21	47	36	51	56	㉗ げ図と	21	6	27	15	25	㉗ ちんちん	16	23	16	28	28	㉗ ちんちん	21	19	19	21	26
⑧ ち指し	5	3	8	5	14	㉘ ち都と	9	13	24	31	19	㉘ ちんちん	66	69	72	47	47	㉘ ちんちん	47	45	35	49	36
⑨ か火ひ	82	92	96	73	80	㉙ もく目め	77	87	66	81	77	㉙ ちんちん	86	84	86	79	85	㉙ ちんちん	52	51	61	69	44
⑩ も日ひ	42	13	20	21	26	㉚ が芽め	79	85	84	63	41	㉚ ちんちん	32	41	22	47	41	㉚ ちんちん					
⑪ ち皮ひ	5	1	14	11	24	㉛ かねは	81	85	88	71	77	㉛ ちんちん	24	28	19	40	38	㉛ ちんちん					
⑫ ち田た	83	88	81	87	86	㉜ んん	16	16	18	13	21	㉜ ちんちん	87	93	84	82	76	㉜ ちんちん					
⑬ ち他た	13	8	14	56	23	㉝ たは	32	36	23	16	40	㉝ ちんちん	40	52	36	64	50	㉝ ちんちん					
⑭ ち時じ	17	12	26	28	38	㉞ ちんちん	82	88	88	79	80	㉞ ちんちん	20	17	16	12	23	㉞ ちんちん					
⑮ ち耳じ	8	3	7	8	17	㉟ ちんちん	44	53	32	49	50	㉟ ちんちん	58	59	42	72	70	㉟ ちんちん					
⑯ ち寺じ	6	3	14	8	17	㊱ ちんちん	23	33	12	16	26	㊱ ちんちん	24	28	26	21	35	㊱ ちんちん					
⑰ ち世よ	69	57	59	20	32	㊲ ちんちん	42	51	34	52	49	㊲ ちんちん	33	33	38	16	27	㊲ ちんちん					
⑱ ち夜よ	75	76	78	77	81	㊳ ちんちん	40	57	36	69	56	㊳ ちんちん	15	25	16	36	27	㊳ ちんちん					
⑲ ち野の	71	77	77	79	85	㊴ ちんちん	63	47	62	29	53	㊴ ちんちん	55	44	26	37	45	㊴ ちんちん					
㉚ ちね	70	85	65	72	38	㊵ ちんちん	15	20	16	16	22	㊵ ちんちん	83	79	85	80	80	㊵ ちんちん					

正答
数字は%

(問1)

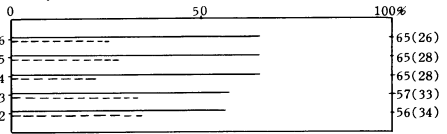
1. 全体の正誤答率の平均



(問1)

表2

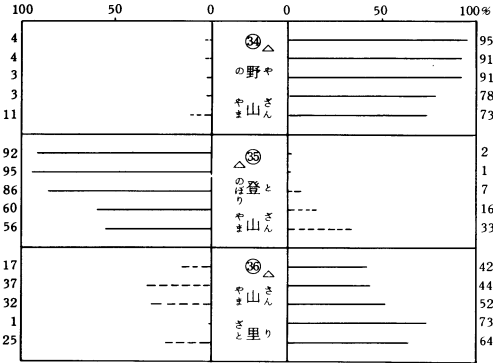
全体の正誤答率の平均%



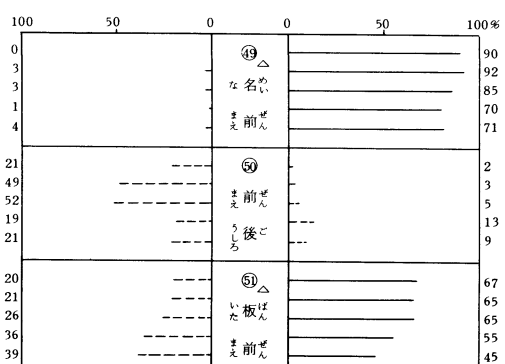
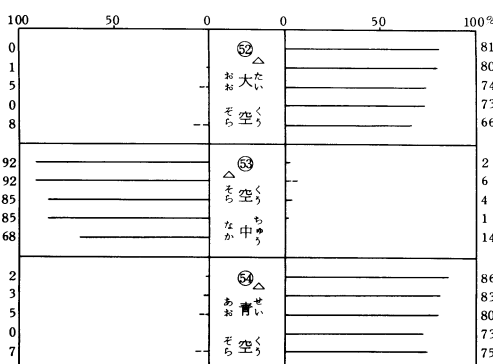
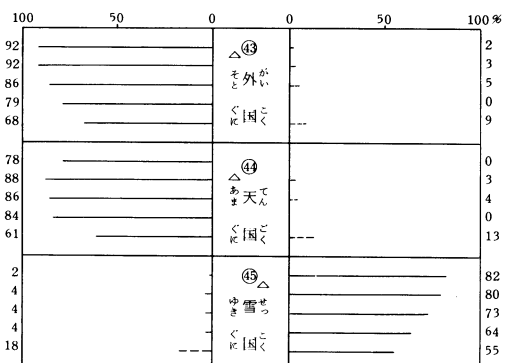
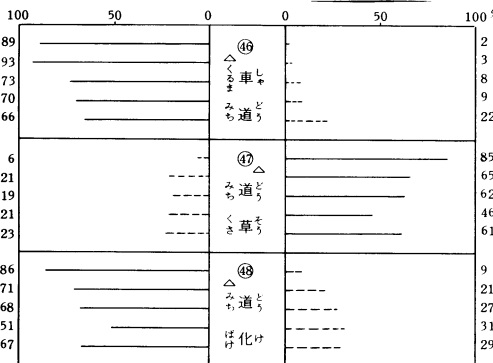
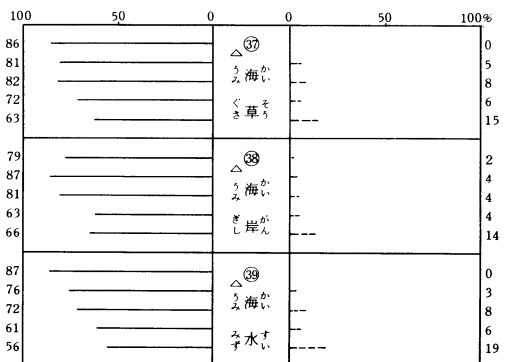
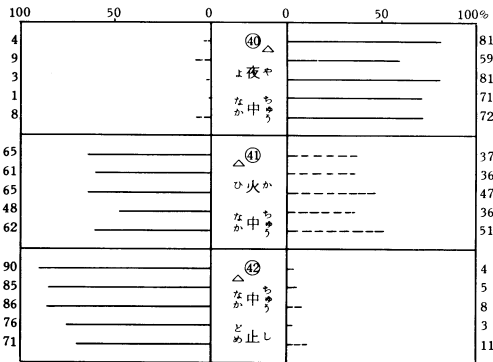
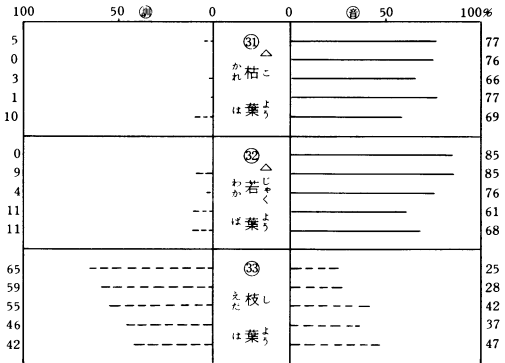
(問2)

表4

————— 正答(まちがいに△印をつけたもの)
 - - - - - 誤答(まちがいに△印をつけたもの)



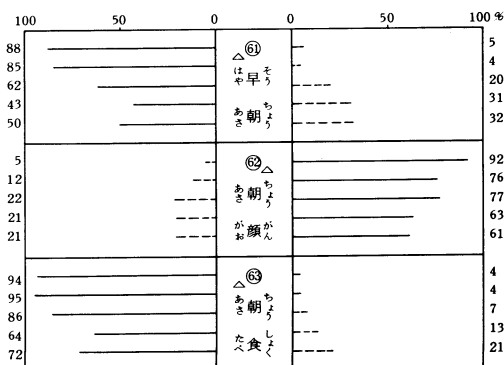
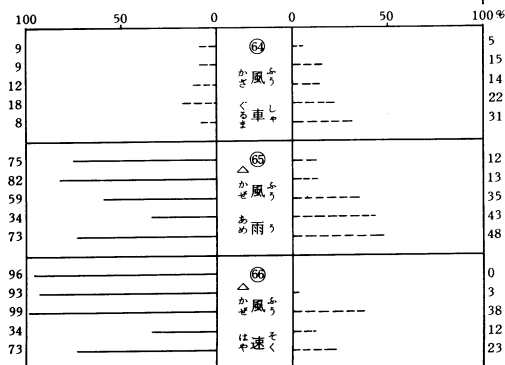
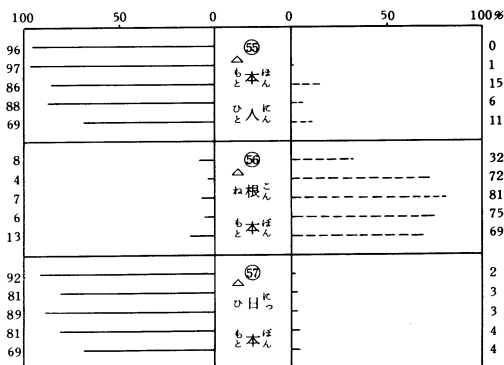
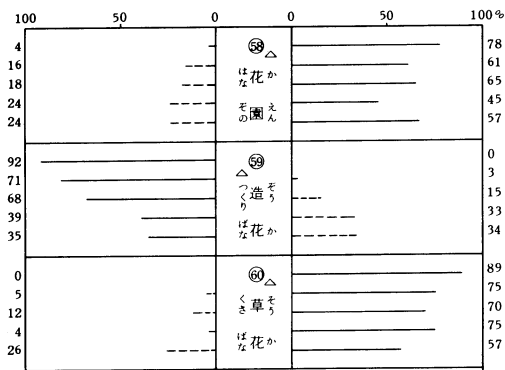
上から6・5・4・3・2年生



II 結果とその考察

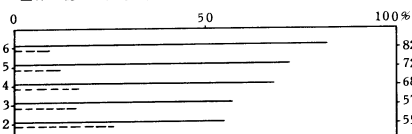
(1) 問一について

結果は表1に示す通りである。全部の名の平均を各学年ごとに出すと表2のようになり正答率は、四・五・六年生はみな65%と半数をやゝ上回る程度で、ほとんど変わらない。二・三年生は名は、やゝ落ちるが、それでも大きな差はない。つまり、二・三年生時代に身につけた漢字に対する意識が、四年生で定着し、それ以上何の進歩も見られないということだろう。また誤答率を見ると、四年生が最少の22%を示しているが、あとは六年生から二年生へとその名が増している。しかし、これとても、大きな変化ではない。低学年で誤答が増す事は予想されていたが、これ程、微かな差とは考えなかった。和語と漢語に対する感覚というこの方がむしろ明らかになった気がする。

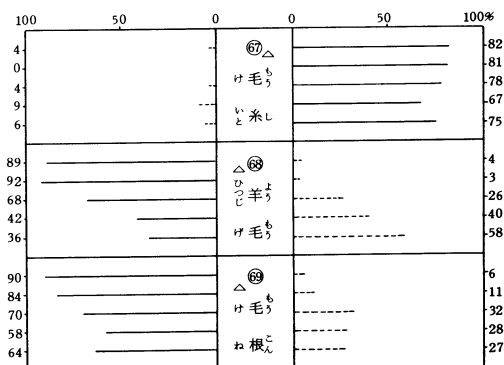
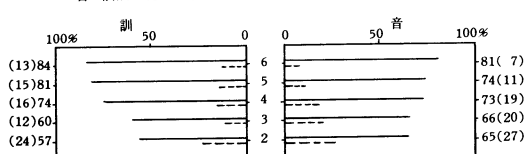


(2) 表 5

全体の総名 平均正誤表



音・訓別 総名 平均正誤表 表 6



問一についてはA(①)とB(②)までの漢字の出題が少し異なる。Aは一字一音のものをとり上げて、同じ音でも和語漢語の区別がつかどうかを見るために出したものである。Bは、同じ漢字で三つの熟語を作り、三つ並べておくことにより、音感覚で和語と漢語の別が出来るかを調べるためのものである。私の予想では、当然一字一音の区別が難しいと考えていたが、結果は表3のようである。両方とも正答率に大差はないが、圧倒的に、Bの熟語が誤答率が高い。熟語を三つ並べてあるので、それぞれの音の入れ違いですぐ見分けられると考えたが、子どもたちには、Aにおける音の区別の方が、やさしかったようである。これは、Aの出題漢字が、一・二年生習得の漢字であり、音感覚の判断というよりは、この時期行なわれる初期の漢字指導の徹底ぶり、半ば記憶されていると考えて良いだろう。しかしBの語になると単独漢字でなく熟語であることも災いし、単に音感覚で、区別していたように思う。知識的なもので区別したのかとも考えてはみたが、それにしては、高学年の伸びがあまりに少ない。やはり音感覚を基準にしたと考える方が妥当のようである。

ただひとつ付け加えておきたいのは、音感覚による判断のあいまいさである。漢語の最も代表的な音『—ン』の付く語の指摘率をあげてみると次のようになる。

学年	6	5	4	3	2
千(せん)	20	53	19	12	17
田(でん)	83	88	81	87	86
根(ねん)	70	85	65	72	38
身(しん)	53	43	49	63	39
野山(のせん)	6	54	3	2	2
名前(なまえ)	82	88	88	79	80
日本(にっぽん)	85	84	86	79	85
毛根(けこん)	33	33	38	16	27
	52	51	61	69	44

この八語はこの結果を見るために○印をつけるように考え作ったものだが、田・山・前を除いてはあとが低く、しかも%がまちまちで、何か発達が見られるというわけでもない。これから考えても、和語と漢語に関して、音感覚で判断しているとは一応考えられはするものの、その音に確かに反応しているという確証はなく、漢語と和語そのものへの意識は大変低く、混乱状態であるといえる。ただ、音感覚訓練により、それが解決されるか否かは疑問として残るが、問一で言える限りに於ては、四年生が、聴覚の完成される時期であり、ことばに対する意識の感覚的な芽ばえも、この学年に潜んでいると考えられそうである。

(2) 問二について

問二の問題は、問一の①～⑥までの熟語について、そのふりがなの使い方のあやまりを指摘する問題である。その結果は表4の通りで、三語一組にして、音訓別に%を記入したが、この三語の中で何か特徴らしいもの考えたが、何も見出だせなかった。そこで全部の%を合計し、正・誤答

語	学年	6	5	4	3
1. 枯葉	問一	81	85	88	71
	問二	77	76	66	77
2. 野山	問一	82	88	88	79
	問二	77	66	77	69
3. 海水	問一	95	91	78	78
	問二	63	47	62	29
4. 中止	問一	87	76	72	61
	問二	60	49	65	24
5. 雪国	問一	90	85	86	76
	問二	83	88	85	81
6. 道化	問一	82	80	73	64
	問二	65	69	72	47

とも平均%を学年ごとに出してみた。(表5)これによると問一よりは差が出て、二年生～六年生まで正答率は上がり、誤答もそれを裏付けるかのようになり六年にいくに従い低くなるという学年発達がみられる。これは問一のように音感覚の区別を行ったというより、その年の漢字に対する慣れがそうさせたのだと思う。表6でわかるように、和語(訓読み)、漢語(音読み)の別はあまり関係なく同じ割合で発達している。最後に問一と問二の同じ漢字を使っての問題のそれぞれ%に触れておきたい。問一で選択した基準を、問二がどれ程生かすかを考えての問題作りだったが、次の13語は問一問二とも、同じ%にはならず、日本一語を除いては、問二の方が%が高かった。

語	問一	問二
7. 名前	85	84
8. 大空	87	93
9. 日本	33	33
10. 草花	83	79
11. 早朝	63	56
12. 風速	55	48
13. 毛根	52	51